

1992 New Year's Concert

in the 150th Jubilee Year of the

Wiener Philharmoniker

CARLOS KLEIBER



LIVE RECORDING

SICC 204-F

1989 New Year's Concert

Wiener Philharmoniker

CARLOS KLEIBER



LIVE RECORDING

カルロス・クライバー／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 ニューイヤー・コンサート1989&1992

<ニューイヤー・コンサート1989>

Disc 1 (Total time • 46:58)

- ① 加速度ワルツ 作品234 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (8:23)
"Accelerationen"(Walzer) Op.234 (Johann Strauss, Jr.)
- ② 田園のポルカ 作品276 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (2:37)
"Bauern-Polka" Op.276 (Johann Strauss, Jr.)
- ③ ワルツ「わが家で」 作品361 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (8:29)
"Bei uns z'Haus"(Walzer) Op.361 (Johann Strauss, Jr.)
- ④ ポルカ・マズルカ「とんぼ」 作品204 (ヨーゼフ・シュトラウス) (4:42)
"Die Libelle"(Polka mazur) Op.204 (Josef Strauss)
- ⑤ 喜歌劇「こうもり」序曲 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (7:46)
"Die Fledermaus" Ouverture (Johann Strauss, Jr.)
- ⑥ ワルツ「芸術家の生活」 作品316 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (8:53)
"Künstlerleben"(Walzer) Op.316 (Johann Strauss, Jr.)
- ⑦ ポルカ「風車」 作品57 (ヨーゼフ・シュトラウス) (3:22)
"Moulinet"(Polka) Op.57 (Josef Strauss)

CARLOS KLEIBER / WIENER PHILHARMONIKER NEW YEAR'S CONCERTS 1989&1992

Disc 2 (Total time • 40:13)

- ① ポルカ「ハンガリー万歳!」 作品332 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (2:27)
"Eljen a Magyar!"(Ungarische Polka schnell) Op.332 (Johann Strauss, Jr.)
- ② ポルカ「クラップフェンの森で」 作品336 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (3:53)
"Im Krapfenwaldl"(Polka francaise) Op.336 (Johann Strauss, Jr.)
- ③ ワルツ「春の声」 作品410 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (6:38)
"Frühlingsstimmen"(Walzer) Op.410 (Johann Strauss, Jr.)
- ④ ピチカート・ポルカ (ヨハン・シュトラウスⅡ世／ヨーゼフ・シュトラウス) (2:50)
"Pizzicato-Polka" (Johann Strauss, Jr./Josef Strauss)
- ⑤ オペラ「騎士バズマン」チャルダース (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (4:15)
"Ritter Pázmán"(Csárdás) (Johann Strauss, Jr.)
- ⑥ ポルカ「おしゃべりなかわいい口」 作品245 (ヨーゼフ・シュトラウス) (2:50)
"Pläppermäulchen"(Polka schnell) Op.245 (Josef Strauss)
- ⑦ ジョッキーク・ポルカ 作品278 (ヨーゼフ・シュトラウス) (1:25)
"Jokey-Polka" Op.278 (Josef Strauss)
- ⑧ ワルツ「美しく青きドナウ」 作品314 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (9:44)
"An der schönen, blauen Donau"(Walzer) Op.314 (Johann Strauss, Jr.)
- ⑨ ラデツキー行進曲 作品228 (ヨハン・シュトラウスⅠ世) (3:24)
"Radetzky-Marsch" Op.228 (Johann Strauss, Sr.)

<ニューイヤー・コンサート1992>

Disc 3 (Total time • 75:13)

- [1] 歌劇「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲 (ニコライ) (8:55)
"Die lustigen Weiber von Windsor" Overture (Otto Nicolai)
- [2] ポルカ・マズルカ「町といなか」作品322 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (4:23)
"Stadt und Land" (Polka mazur) Op.322 (Johann Strauss, Jr.)
- [3] ワルツ「オーストリアの村つばめ」作品164 (ヨーゼフ・シュトラウス) (8:35)
"Dorfschwalben aus Österreich" (Walzer) Op.164 (Josef Strauss)
- [4] ポルカ「観光列車」作品281 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (2:49)
"Vergnügungszug" (Polka schnell) Op.281 (Johann Strauss, Jr.)
- [5] 喜歌劇「ジプシー男爵」序曲 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (7:48)
"Der Zigeunerbaron" Overture (Johann Strauss, Jr.)
- [6] ワルツ「千一夜物語」作品346 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (8:20)
"Tausend und eine Nacht" (Walzer) Op.346 (Johann Strauss, Jr.)
- [7] 新ピチカート・ポルカ 作品449 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (3:49)
"Neue Pizzicato-Polka" Op.449 (Johann Strauss, Jr.)
- [8] ペルシャ行進曲 作品289 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (1:51)
"Persischer Marsch" Op.289 (Johann Strauss, Jr.)
- [9] トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品214 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (2:46)
"Tritsch-Tratsch-Polka" Op.214 (Johann Strauss, Jr.)
- [10] ワルツ「天体の音楽」作品235 (ヨーゼフ・シュトラウス) (9:19)
"Sphärenklänge" (Walzer) Op.235 (Josef Strauss)
- [11] ポルカ「雷鳴と電光」作品324 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (3:13)
"Unter Donner und Blitz" (Polka schnell) Op.324 (Johann Strauss, Jr.)

- [12] ワルツ「美しく青きドナウ」作品314 (ヨハン・シュトラウスⅡ世) (10:02)
"An der schönen, blauen Donau" (Walzer) Op.314 (Johann Strauss, Jr.)
- [13] ラデツキー行進曲 作品228 (ヨハン・シュトラウスⅠ世) (3:16)
"Radetzky-Marsch" Op.228 (Johann Strauss, Sr.)

カルロス・クライバー指揮

CARLOS KLEIBER, Conductor

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

WIENER PHILHARMONIKER

Sound Recording: UNITEL

Producer: Helmut A. Muhle (1989)

Postproduction Producer: Cord Garben (1992)

Postproduction Engineer: Sid McLauchlan (1992)

Recording: January 1, 1989 (Disc1&2), January 1, 1992 (Disc3) Musikverein, Großer Saal, Vienna

Wiener Philharmoniker appears by courtesy of Deutsche Grammophon GmbH, Hamburg

Cover Design: C.C.Garbers

Cover Photo: Vivianne Purdom

[カルロス・クライバーのVPO ニューイヤーズ・コンサート]

カルロス・クライバー(1930-2004)が指揮者として活動したのは、1954年にポツダム(ドイツ)でミレッカーのオペレッタ《ガスパローネ》を振って正式デビューして以来、99年のキャリア(イタリア)におけるバイエルン放送交響楽団とのコンサートまでである。その間、45年は決して短い年月ではないが、94年に東京で行われたウィーン国立歌劇場・日本公演での《薔薇の騎士》以降は殆ど引退状態であったのもまた周知の通りである。生涯でもっとも数多く指揮したのはミュンヘンのバイエルン州立歌劇場時代で、1968年のデビュー以後、20年間に260公演を振っているのだ。とくに75年と76年はバイロイト音楽祭の《トリスタンとイゾルデ》やスカラ座での《薔薇の騎士》もあわせて年間45回ほど指揮台に立ち、それがピークであった。いわば働き盛りの当時でも、年間20回に満たない年もあり、とにかく仕事の絶対量から言えば、これほど少ない指揮者はいないだろう。

レコード(CD)、映像ともなると、正規にリリースされたものは非常に限定されており、1973年の《魔弾の射手》から始まる彼のディスコグラフィは、ベートーヴェン、シューベルト、ドヴォルザ

ークの「ピアノ協奏曲」(スヴィヤトスラフ・リヒテルの伴奏)、《こうもり》、《椿姫》、ブラームス、モーツァルトと続いて、89年と92年の“ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(VPO)ニューイヤーズ・コンサート”ライブ、そして94年の映像ライブ《薔薇の騎士》で終了している。ほぼ1ダースほどのアイテムの、いずれもがかけがえのない音源であることは明らかなが、それにしても“VPOニューイヤーズ・コンサート”のCD化を彼が許可したことは、感謝して余りある。クライバーのレコード制作でつねに問題になるのは、彼が仕上げに拘るあまり、最終的な発売許可を容易に下ろさず、数年間も待たされるケースが多かったから、ましてライブ収録を前提にしたプロジェクトはさらに困難だったのだ。ただ“VPOニューイヤーズ”はテレビ及びラジオ同時中継が実施されるという条件が課されているため、それに付随するライブCD制作に関してはクライバーも目をつぶったわけだ。

そのような経緯を経て、いま我々に残された1989年と92年、2回分の“VPOニューイヤーズ・コンサート”のアルバムは、なんと軽妙洒脱で粋な名人芸を聞かせてくれることか。カルロス・クライバーという不世出の指揮者を偲ぶ貴重な遺産であり、音楽を愛するすべての人々に

とっての宝物に違いない。

* * *

クライバーとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(VPO)との関係、なかなか“ニューイヤーズ”を指揮するに至った過程が興味深い。

VPOはウィーン国立歌劇場管弦楽団を母体とするオーケストラであり、彼等がコンサートをを行うときにVPOと名乗っている。1973年10月にクライバーが国立歌劇場にデビューを果たし、《トリスタンとイゾルデ》を5回指揮したことにより、まずは国立歌劇場管弦楽団との最初の顔合わせが実現した。それで翌年、1974年3月に彼等はコンサート・オーケストラとして、つまりVPOとしてカルロスと共演の運びに至り、それがコンサートではなく、いきなりレコーディング・セッションが組まれたのだ。しかも曲目がベートーヴェンの「交響曲第5番『運命』」であったというのは、とにかく常軌を逸する破格扱いだ。VPOと「運命」の録音を残している指揮者を挙げてみれば、レコード史上におけるこの時の録音の意味が一目瞭然だし、そもそもVPOにデビューする指揮者との初録音が「運命」などということは、将来にもあり得ないことだろう。

カルロスの最初の録音である《魔弾の射手》(オーケストラはドレスデン・シュターツカペレ)に

* * *

次ぐ、第2弾としての「運命」であったわけだが、結果としてクラシック界に与えた衝撃は大きく、ヨーロッパでも「噂の“秘密兵器”が遂にその全貌を現した!」といった評判が飛び交ったものであった。カルロスとVPOの組み合わせによる「運命」は大きな賭けであったに違いないが、予想を上回る(と言うか、予想通りと言うか)成果を上げ、以後次々とVPOとの録音が続いたのは、まことによこばしい限りだ。VPOとの実際のコンサートに関しては、「運命」を録音した74年10月にプラティスラヴァ(スロヴァキア)とイエテボリ(スウェーデン)へ客演しているのみで、地元ウィーンでのコンサートに直接結びついていないところが、また格式を重んじるVPOならではの措置というものであろう。

翌75年のベートーヴェン「交響曲第7番」、78年9月のシューベルトの「交響曲第3番」と「同第8番『未完成』」のレコーディング、さらには同年12月の国立歌劇場における《カルメン》プレミエを経て、ようやく79年にカルロスのウィーンにおけるコンサートが実現した。12月に開かれた“第3回定期演奏会”で、この時の曲目はウェーバー「《魔弾の射手》序曲」、モーツァルト「交響曲第33番」、ブラームス「交響曲第4番」である。

クライバーと“ニューイヤーズ”の直接の結びつきは、翌80年のVPOバル（舞踏会）である。例年、ファッシング（謝肉祭）期間にあたる1月の第3週の木曜日にVPOは楽友協会でバルを開催しており、そのときどきにスター指揮者が招待されてオープニングを振ることになっているのだが、このときはカルロスに白羽の矢が当たったのである。すでにミュンヘンの《こうもり》が大評判になっていて、全曲盤（バイエルン州立管弦楽団）も大好評であり、ことに“究極のボルカ”「雷鳴と電光」の噂は、それこそ雷鳴と稲妻のように轟（とどろ）き渡っていたから、VPOとしては一度手合わせして様子を見ようという気になったのであろう。とにかく彼のボルカ・シュネル（速いボルカ）はその疾走するスピードが特徴で、すべてが振り回されてしまうような狂乱のテンポが特徴なのだから。

VPOバルは、つまるところ“ニューイヤーズ・コンサート”の予備審査であって、いま元日のコンサートに招かれている指揮者は、大体この選考を経ているのだ。バルで合格したクライバーは、その5月に行われた“伝説の”レンダーバンク祝典コンサート（非公開）にも呼ばれ、そこで振った「《こうもり》序曲」、「皇帝円舞曲」、「雷鳴と電光」が一大センセーションを呼んだのである。

“ニューイヤーズ”の予備審査はもうひとつあって、VPOがツアー先で演奏するアンコールはワルツやボルカが定番になっているが、同行指揮者の適性検査がこで行われるのだ。

カルロスの場合は、81年4月のメキシコ・ツアーが“奇蹟”と言われるほどの大成功を記録し、アンコールの「《こうもり》序曲」も大満足の出来で、“ニューイヤーズ”のための資格は十二分に確認されたのであった。

* * *

とくにコアなクラシック・ファンでなくても、知らない人はいないほどの、VPOの“トレードマーク”たる“ニューイヤーズ・コンサート”は、1939年にクレメンス・クラウスによって始められ、その後25年間はVPOコンサートマスターのヴァイリー・ボスコフスキーによるヴァイオリン片手の弾き振りで知られている。1980年からはロリン・マゼールの時代が定着していたため、すぐにクライバー登場、という進展には至らなかったが、初期のマゼールのシュトラウス演奏に対してネガティブな反応も大きく、メキシコでの評判を盾に、クライバーを出せ！という意見が出たのも事実である。

7回連続で元日のウィーンを指揮したマゼールの後、現在のように毎年異なる指揮者が登

場するようになって、ヘルベルト・フォン・カラヤン、クラウディオ・アバド、そして89年と92年に“待望の”クライバー、ほかにズービン・メータ、リッカルド・ムーティ、その後はニコラウス・アーノンクール、小澤征爾と続くことになる。

クライバーの場合、“VPOニューイヤーズ”指揮者として、もうひとつ大きなファクターがあることを、ここで説明しておこう。彼はオーストリア国籍を持つオーストリア人なのである。往年の名指揮者である父親のエーリヒはウィーン生まれで、彼がベルリン国立歌劇場・音楽監督の時代にカルロスがベルリンで生まれた。カルロスの出生届には当然、オーストリア人で、ファースト・ネームはカールと記入されている。ところが、ナチス政府と対立したエーリヒは5年後に家族とともにブエノスアイレスに移住し、アルゼンチン籍を取得した時点で、息子・カールの名前もスペイン語のカルロスに変えたのだ。ただし、カルロスは50才になったとき、再びオーストリア国籍に戻っている。

シュトラウスの音楽の本質とはどこまで関係するか、様々な見解があるかもしれないが、一応カルロスの出自はオーストリアであり、国籍も同国であるということを念頭に置きながら彼のワルツを聞くと、また感触が違うかもしれない。

クラウス、終戦直後のヨーゼフ・クリップス、そしてボスコフスキー以降、カラヤンを除いて“VPOニューイヤーズ”を指揮しているオーストリア人はクライバーのみなのである。

* * *

クライバーとVPOの関係に戻ると、メキシコ・ツアーの翌年、1982年2月には定期演奏会に再登場して、ハイドン「交響曲第94番「驚愕」」、ベルク「《ヴォツェック》より3つの断章」、ベートーヴェン「交響曲第7番」のプログラムで確たる成果を挙げている。しかしながら同年12月の定期演奏会、およびそれに続く映像収録のための公開演奏会ではブローベの途中で失踪するというスキャンダルを起こしたのだ。そのため、ウィーン復帰には冷却期間が必要となり、次の登場は88年3月まで待たなければならなかった。このときの定期演奏会の曲目はモーツァルト「交響曲第36番「リンツ」」とブラームス「交響曲第2番」で、異様に緊張した楽友協会の空気を、いまでも思い出すことができるほどである。

ここで遂にクライバーの“VPOニューイヤーズ・コンサート”出演が決定し、1989年元日がその本番、という手筈が整った。ただし、カルロスがこのコンサートを引き受けてくれたこと自体は素晴らしいことではあるが、ここで当事者

の誰もが頭を抱えることになった。名うてのキャンセル魔であり、本番で何が起るか、カルロスの場合はまったく予測がつかないからだ。全世界にテレビ衛星中継をしているORF(オーストリア放送)が、真っ先に我慢の緒がきれたのだろうか、本番でスタンバイするカヴァー指揮者が真剣に検討されたのだ。ただ、カルロスに匹敵するような指揮者が他にいるわけもなく、またあまりにランクの低い指揮者でも困るわけだ。

ところが当時VPOにはラッキーなことに素晴らしい適任者がいたのである。第3コンサートマスターのエーリヒ・ビンダーで、クリストフ・フォン・ドホナーニの緊急ピンチヒッターを引き受けて、超難曲であるストラヴィンスキーの「春の祭典」を、そのまま本番で振ってしまったほどなのである。ウィーンには指揮法の名教師、ハンス・スワロフスキーがいて、アバド、メータ、ジュゼッペ・シノーポリ等の錚々たる門下生を輩出しているのだが、ビンダーは学生時代に彼のクラスに出入りしていたおかげで、指揮法をマスターしていたのである(ビンダーはその後、本当に指揮者に転向してしまった)。

ビンダーにスタンバイさせれば、万が一、カルロスが出てこなくても元日のコンサートは遂行でき、と関係者一同、ホッと胸を撫で下ろす

幕もあったのだ。そのような心配を知ってか知らずか、カルロスはクリスマス明けのウィーンに現れて、ご機嫌でニューイヤーのリハがスタートしたのである。そのまま、大晦日も絶好調ではあったが、だからといって元日の本番を振るという保証は絶対無いわけで、ビンダーとしては気の休まる暇がなかったであろう。ORFは、元日に何らかの事故が生じた場合を想定して、大晦日の映像をすり替えられるよう手配したと言われている。

* * *

“VPOニューイヤーズ・コンサート”の手順として、クリスマス明けの28日朝10時からリハーサルがスタートし、30日朝には“軍人のためのコンサート”が開かれる。「1年間、国の守りご苦労であった」と大統領が年の瀬に際して軍人を労う国家行事であり、これがゲネプロに相当する。次いで31日夜の“シルヴェスター(大晦日)コンサート”、そして元日朝の“ニューイヤーズ”と都合3回の公開演奏会が開かれる。(以前、30日は軍人のみの非公開であったが、近年は一般客にも開放するようになった)。

ここでVPO団員にとって大問題が生じる。ウィーンのみならず、一般にヨーロッパでは大晦日が年中で一番バカ騒ぎする日になっているのだ

が、元日に出番を控えた団員は、おとなしく我慢していなければならないことになる。勿論、それでも夜を徹して飲み明かすツワモノもいて、元日の朝は平然と楽友協会のステージに立つのが正統的(?)フィルハーモニカー(フィルハーモニー団員)なのだというのだが。

“シルヴェスター・コンサート”が開かれている大晦日の晩は、同じ時間に国立歌劇場で、これまた名物の《こうもり》が上演されるため、オーケストラは二手に分かれて対処している。だいたい1年交替ぐらいのローテーションで彼等は交互に出演している様子だ。

* * *

途中、91年10月にモーツァルト「交響曲第36番“リンツ”」とブラームス「交響曲第2番」の映像収録を終了して、クライバーにとって二度目の“ニューイヤーズ”にあたる1992年は、VPO創立150周年の年でもあった。彼等が国立(当時は宮廷)歌劇場のピットから出て第1回目のコンサートを開いたときの指揮者がオットー・ニコライであり、150周年記念の“ニューイヤーズ”でも、まず彼の代表作である「《ウインザーの陽気な女房たち》序曲」からコンサートが始まった。クライバーの選曲はセンスが良く、どれもが名演であり、これらのダンス音楽と彼の瞬発的な音楽性が最高

にマッチして、目くるめく音楽になるわけだ。その意味からも「雷鳴と電光」は何度聞いても翻弄させられる究極の演奏であることに変わらない。くわえて筆者のお気に入りにはニコライ、シュトラウス二世の「《ジプシー男爵》序曲」、それに弟ヨーゼフの「天体の音楽」だろう。

92年の“ニューイヤーズ”を指揮したあと、2月のバリ、3月の日本(大阪、名古屋、東京)ツアーをキャンセルしたのは、やはり痛恨事だ。それでも同年11月、VPO創立150周年記念行事の悼尾を飾る式典に招待されて「雷鳴と電光」と「《ウインザーの陽気な女房たち》序曲」を振っている。

1993年5月の第8回定期演奏会ではモーツァルト「交響曲第33番」とR.シュトラウス「英雄の生涯」を振り、とくに後者は誰も聞いたことがない、カルロスの“初出”ということで大騒動になった。(正規盤リリースが待たれるアイテムのひとつだ!)

1994年1月にはVPOバルに再度呼ばれて、得意の「《ジプシー男爵》序曲」を振り、これがVPOとの最後の演奏になった。同年3月にはウィーンで3回、10月に東京で6回振った《薔薇の騎士》がウィーン国立歌劇場を指揮した最後であり、ピットに入っていたオーケストラ団員たち

とのお別れでもあった。

2004年のザルツブルク音楽祭では《薔薇の騎士》がプレミアで出されることになり、ルツツカ音楽祭総監督がカルロスに出演を打診していると発表したため、ここで再び共演できる、とVPOの面々は半信半疑ながらも希望を持ったのである。だが、その直前にVPOメンバーも、そしてザルツブルクの《薔薇の騎士》に一縷(いちる)の望みを賭けていたファンをも失望させるように、カルロスはこの世から永遠に去ってしまったのである。

<2004年9月 山崎 睦>

〔150年間にわたる民主性 (デモクラシー)と自主管理〕

世界中の何百万もの視聴者が見守る中、1992年1月1日、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は“黄金に輝く”ウィーン楽友協会ホールにおいて記念すべき創立150周年の幕を開けた。このニューイヤー・コンサートではニコライによるオペラ“ウインザーの陽気な女房たち”の序曲がカルロス・クライバーによって指揮されたが、それはまさに人々の熱狂的な歓迎を受けてウィーンを代表するマイスター・オーケストラ“フィルハーモニー(フィルハーモニー管弦楽団)”が産声を上げた1842年3月28日、イースターの“壮大なるコンサート(大合奏)”と同じ曲目であった。このときの指揮者は、プロイセン王国のケーニヒスベルクに生まれ、帝国王立宮廷歌劇場の楽長を務めていたカール・オットー・エーレンフリード・ニコライ、作曲家自身であった。オーケストラの生まれた地ウィーンにおいてのみならず、世界においても“類をみない”存在であり、世界中の人々に“愛されてきた”ウィーン・フィルハーモニー、その歴史はウィーンの大円舞場レドゥーテンザールにおいて帝国王立宮廷歌劇場のメンバー全員によって構成されたアンサンブルによる“壮大なるコンサート”に始まった。

実際にこのようなコンサートはそれ以前にも開かれていた。しかし、フィルハーモニー史の公式執筆者を始め、多くの人々が“フィルハーモニー・アカデミー”と呼ばれているこのコンサートをもってウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の誕生としている。それはこの演奏会をもって“フィルハーモニーの概念”と呼ばれる原則が初めて実践に移されたからである。そしてそれらは150年たった今日においても脈々と息づいている；

——ウィーン国立歌劇場(もと王立宮廷歌劇場)オーケストラの楽団員である芸術家のみがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の楽団員となることのできる。

——楽団員は芸術においても、また組織的にも、経済・財政的にも自ら責任を負うものである。

——すべての決定は原則として民主的な方法によってなされるものとする。

——実際の運営業務は民主的に選出された12人の委員によって行われる。

上記の原則は一見とても簡単なものに見えるが、これこそが150年にわたってウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の発展、継続、前進、高い演奏水準、世界的評価を支えた私的な楽友協会の規範となったのである。ウィーン・フィ

ルは大家であるがゆえに、世界各国におけるコンサートの場合やメディアから常により高い要求を突きつけられてきた。しかしそのような状況下に置かれながらも、彼らは音楽の世界・歴史における例外的な存在であり続け、羨望の対象となってきた。そんな彼らゆえ、150周年のお祝いの年とはいえ、ゆっくりと祝っている暇がない。むしろ彼らにとっての最高のお祝い、演奏をすることそのものであり、カルロス・クライバーとの数々の特別な祝祭コンサートや世界ツアーはまさにお祝いの場であったのだ。聴衆にとっても、ウィーン・フィルの数ある魅力を楽しむことができるだけでなく、他に類を見ない、そして常に語り草となってきた“ウィーンならではの響き”を聞いて、体感することのできる素晴らしい機会となった。彼らの響きとは、もはや一つの様式であり、最も信頼にたる科学研究法に基づいても定義付けることは不可能だ。それは音楽的直感や音楽的感情を通してのみ理解することのできる一つの現象とも言うべきものなのだ。そしてそれが最も顕著に現れるのが(おそらく)ニューイヤー・コンサートであろう。

ここで話をオーケストラの成り立ちに話を戻させていただきたい。ちょうど150年前、まだ駆け出しの若きフィルハーモニーは最初のコンサ

ートをオットー・ニコライの指揮で行った。その後も表面的には成功を取めているかに見えていたが、たった11回のコンサートの後、1847年にオットー・ニコライがウィーンからベルリンに移ってしまい、彼らの野心的な企ては水泡に帰すこととなる。それから12年もの空白の時を経た後、ついに、オペラ座の監督を務めるカール・エッケルトが1860年1月15日に“フィルハーモニー・コンサート”をウィーンにおいて開催した。そしてその後この習慣は途切れることなく続いてきた。この当時、そしてその後もかなりの期間、フィルハーモニーは一人の主席指揮者にこだわると言えることはしたくない、と考えてきた。そしてその結果、1903年から1908年にかけてコンサートごとに客演指揮者と契約を交わしていた時期を除いて、1933年まではシーズンごとに一人の指揮者を定め、その指揮者が定期公演をすべて指揮する形式をとったのである。この期間に指揮者を務めたのが、カール・エッケルト、オットー・デッソフ、ハンス・リヒター、ヴィルヘルム・ヤーン、グスタフ・マーラー、ヨゼフ・ヘルメスベルガー・ジュニア、フェリックス・フォン・ヴァインガルトナー、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、そしてクレメンス・クラウスである。1933年以降、客演指揮者のシステムがそれまでとは違った形

態をとるようになった。それは楽団員の仲間内の表現を借りて言うならば、一人の“主席指揮者”との結婚生活よりも、何人もの愛人との自由でリベラルな関係の方を優先させたい、とするものであり、より多くの時代を代表するような指揮者たちと関係を持ちたいとする考え方であった。これは一言で言って、ウィーン外交術に例えることができる。

その一方でニューイヤー・コンサートの伝統は、比較的新しいものである。指揮者、ヨハン・シュトラウスとフィルハーモニーとの関係は、ただ散発的、あるいは偶発的に契約関係が交わされてきただけの、そんな関係であった。そしてオール・シュトラウス・プログラムのコンサート“を楽団員たちが”決定したのは、なんと1925年になってからのことだったのだ。これはあらゆるウィーン音楽の大家であり、師であるシュトラウスの生誕100周年を祝うための特別なプログラムであった。フェリックス・フォン・ヴァインガルトナーやブルーノ・ワルターはツアー中のコンサートにおいてシュトラウス一家の作品をアンコールに好んで取り上げ、それは好評を博していた。しかしそれにもかかわらず、ニューイヤー・コンサートが慣例化したのは1930年代終わりになってからのことであった。そしてここで

忘れてはならないのがクレメンス・クラウスの存在だ。大きな役割を果たしたクラウスが去った後も、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサート・マスターであったヴィリー・ボスコフスキーが、クラウスの後継者としてその後25年にわたって毎年ニューイヤー・コンサートの指揮者を務めた。この年月を経て、今ではロリン・マゼール、ヘルベルト・フォン・カラヤン、クラウディオ・アバド、カルロス・クライバー、そしてズービン・メータといった主席客演指揮者たちがその存在価値を世界に証明し、定評を得るにいたっている。

1989年に行われたカルロス・クライバーとのニューイヤー・コンサートはセンセーショナルな成功を収め、1992年に再び彼が招聘されることとなった。実際のところ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とカルロス・クライバーの関係は、何者も入り込むことができないような特別なものであり、そのような密な関係は他に存在しなかった。クライバーはウィーン国立歌劇場における《トリスタンとイゾルデ》《薔薇の騎士》《カルメン》《ラ・ボエーム》といったオペラを指揮しただけでなく、ウィーンにおける特別なコンサート期間やツアー、そして放映用コンサートにおいても指揮台に立ってきた。

ウィーンの音楽評論家たちは、それぞれが独自の意見を持ち、同じ批評をすることがないことで知られている。しかしそんな批評家たちが満場一致で、1992年のクライバーのニューイヤー・コンサートを賞賛した。そして、より高い賛辞を贈らんと競うかのようでさえあったのだ。2000人あまりの音楽ファンがウィーン楽友協会ホールで実際にその演奏を聞く機会に恵まれ、何百万の人々がテレビを通してその光景を見つめた。そしてここにある録音が、時を経て今再び、特別なひとときを体験させてくれることとなろう。

<1992年 ヴァルター・ギュルテルシュミート>

(訳:久野理恵子)

※「ニューイヤー・コンサート1992」オリジナル盤ライナーノーツより日本語訳転載

<曲目解説>

Disc 1

① 加速度ワルツ (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

曲名どおり、ゆっくりと始まって徐々に弾みがついて速くなっていく——最初の部分がややアツチェランド気味に演奏されるように書かれたワルツ。1860年2月14日、ゾフィエンザールと呼ばれる舞踏会場で催された謝肉祭の「技術者舞踏会」のために、依頼を受けて作曲したもののだが、当時のヨハン・シュトラウスⅡ世(1825-1899)は超売れっ子の人気タレント。あちらこちらの舞踏会場を掛け持ちで演奏して回っていて作曲の暇がなかなか取れず、この曲などは当の舞踏会の前日、早朝5時ごろ、最後の客が踊り疲れて帰った後の舞踏会場の隅のテーブルで、手近のメニューの裏に走り書きでスケッチを書き、一眠りしてから作曲にかかったが、その晩の舞踏会のために一時中断。作曲を仕上げて写譜屋に渡したときには、もう「技術者舞踏会」の当日の朝。写譜が上がってくるまでの間一眠り。午後にはオーケストラに練習をつけて、やっとその夜の舞踏会に間に合わせた、という話が伝えられている。

② 田園のボルカ (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

1856年から1865年まで、ヨハン・シュトラウスⅡ世はウィーンの仕事で二人の弟に任せると、毎年5月頃から半年近くもロシアのパヴロフスク(現プーシキン市郊外)へ演奏旅行に出かけたものだ。収入がいいこともあったが、雑事に煩わされず音楽に専念できることがよかったのだ。パヴロフスクで生まれた名曲は少ない。

1863年2月に、オーストリア帝国宮廷舞踏楽長の名誉ある称号を授与されたヨハンⅡ世は、前年に結婚したばかりの新妻を伴ってロシアへおもむいた。二重の喜びのなかで生まれたのは、歌い手でもあった妻が作ったメロディをもとに書いたチェロのためのロマンス・ト長調「ドルチェ・ピアンティ(甘く哀しく)」、それにうって変わって陽気なこの「田園のボルカ」だった。演奏されることがほとんどない曲で、おそらくこれが初レコーディングだろう。

③ ワルツ「わが家で」(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

1873年のウィーン万国博に際して、日本を含む世界各国から訪れるお客を歓迎して、オーストリア随一の人気者、ヨハン・シュトラウスⅡ世が作曲したのがこのワルツ。ワルツ「ウィーン氣質」もこの時の作品でウィーン・フィルによって初

演されたが、“わが家のつもりで、どうぞ気楽にお過ごしください”という意味で作られたこちらのワルツは、ウィーン男声合唱協会の「夏の合唱祭」で初演されている。本来は“合唱ワルツ”だが、今日ではオーケストラだけの演奏で聴かれることが多い。全世界の人を迎え、また全世界に放送される“ニューイヤー・コンサート”にふさわしい選曲だ。

④ ボルカ・マズルカ「とんぼ」

(ヨーゼフ・シュトラウス)

秋空に飛び交うとんぼ、しばらく空中に静止しては、すいっと飛ぶ小粋な姿が、第3拍にアクセントを置くボルカ・マズルカ特有のリズムで描き出される。ところがこれが意外に演奏が難しい。ウィーン・フィルといえどもなかなかとんぼの飛ぶ感じにならないのだ。過去に日本でも放映された“ニューイヤー・コンサート”のなかでは2回プログラムに取り上げられているが(注：本稿執筆は1989年)、いずれも飛ぶのに失敗している。それがどうだろう、今回はクライバーによって見事に飛ぶことができた。彼の演奏は総じてテンポが速いが、この曲は他の人と比べてむしろ遅く、今でも語り草となっているクレメンス・クラウスの名演以来の出来となってい

る。作曲はヨハンⅡ世の薄命の弟、ヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)。初演は1866年10月21日、フォルクスガルテンの野外音楽堂。

⑤ 喜歌劇「こうもり」序曲

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

1989年の“ニューイヤー・コンサート”の第1部の最後を飾ったのが、1874年にアン・デア・ウィーン劇場で初演されたヨハン・シュトラウスⅡ世の3作目のオペレッタ、彼の最大傑作である「こうもり」の序曲。この曲は3年連続の登場で、1987年のカラヤン、1988年のアバド、そしてこのクライバーと、それぞれに特徴的な演奏を楽しませてくれている。なかでテンポが一番速いのはやはりクライバーだが、大胆なまでにダイナミックな、それでいて細部にまで神経を配った強弱の変化(ディナーミク)で一段と華やかに演奏している。

⑥ ワルツ「芸術家の生活」

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

毎年2月頃の謝肉祭シーズンに催される舞踏会のための実用的なワルツと、コンサート等のためのワルツを、ヨハン・シュトラウスⅡ世はかなりのはっきりと書き分けていた。この芸術家の集

まりである“宵の明星”の舞踏会のための曲は、1867年2月に「美しく青きドナウ」のわずか3日後、同じ会場で初演されながら大変対照的で、こちらは全体に表情が少なく構成も素朴で、いかにも“舞踏会用”らしい。しかしそれでいて今日でも立派に鑑賞にたえるだけの作品になっているところが、ヨハン・シュトラウスⅡ世が“ワルツ王”と呼ばれ、彼の作品を中心にしたこのような華やかなコンサートが開かれる由縁でもある。それにしてもこのカルロスの演奏、往年のファンには懐かしい父エーリヒ・クライバーを思い出させるのではないだろうか。

⑦ ボルカ「風車」(ヨーゼフ・シュトラウス)

以前から曲名の訳が問題になっていたヨーゼフ・シュトラウスのもっともポピュラーな作品だが、1989年のNHKテレビでは突然今までとは違う“水車”の曲名で紹介されていた。もちろんこの方が正しいのだが、長い間「風車」の訳名で親しまれてきたので戸惑った人もいるだろう。ウッド・ブロックが杵のリズムをユーモラスに刻む、テンポの緩やかなくフランス風ボルカで、1858年の作品。

Disc 2

① ボルカ「ハンガリー万歳！」

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

同じボルカでも、今度はテンポの速いくシュネル・ボルカ。1869年3月、ハンガリーの首都ブダペストの王宮舞踏会場で、ヨハンⅡ世とヨーゼフが指揮するシュトラウス・オーケストラが出演して催された「ハンガリー自治2周年記念舞踏会」のために作曲されたもので、ハンガリー国民に献呈されている。コーダでハンガリー独立の志士を讃える有名な<ラコッツィ行進曲>の一節が聴かれるのはそのためだ。

② ボルカ「クラブフェンの森で」

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

クラブフェンはウィーンの北側にある小高い丘、葡萄酒で有名なあたり。かっこうの声がこだまし、小鳥たちがさえずる平和な森のたたずまいが、緩やかなテンポのくフランス風ボルカで描き出される。ところがこの曲、最初は1869年夏に4年ぶりに訪れたロシアのバヴロフスクで「バヴロフスクの森で」という題名で発表したが、翌年ウィーンで初演する際に曲名をウィーン近郊の地名に変えたものだ。いささかお手軽な印象を与えかねないエピソードだが、曲

自体はのびのびと森の自然を謳歌している。クライバーは中間部でちょっとテンポを速めて、浮き立つような楽しさを強調してみせる。

③ ワルツ「春の声」(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

1883年3月1日に当時の名コロラトゥーラ・ソプラノのピアンカ・ピアンキが、アン・デア・ウィーン劇場で開いたリサイタルで初演、その後ウィーン宮廷歌劇場(現国立歌劇場)で歌劇の幕間でも歌って評判となったのがこのワルツだった。1987年の“ニューイヤークンサート”でキャスリーン・バルが歌ったのがそれだが、今回のオーケストラ版の方は同月17日に、まさにこの同じウィーン楽友協会のホールで、エドゥアルト・シュトラウスの指揮によって初演されている。当時58歳だった作曲者は、ちょうどこの頃30歳年下のアデーレとの恋が3回目の幸せな結婚へと発展しつつあった。そしてこの曲は、彼女を伴ってブダペストを訪れた際に、フランツ・リストも同席していた晩餐会の席上で即興的に作られたものと伝えられている。

④ ピチカート・ボルカ

(ヨハンⅡ世、ヨーゼフ・シュトラウス合作)

「クラブフェンの森で」が作られた1869年の

ロシア旅行には、弟のヨーゼフも同行していた。このところ仕事の過労からノイローゼ気味で落ち込んでいるヨーゼフを心配して、転地療養をかねてヨハンが無理をして入れた仕事だった。5月から10月まで、白夜のバヴロフスクで、演奏の合間に作曲したり、二人で語り合ったりしているうちに、どうも43歳と41歳の兄弟は童心に帰ってしまったらしい。多分父のヨハン・シュトラウスⅠ世の新曲を盗み聞きしてはピアノで弾いていた子供の頃のように、二人で連弾でもしていたのだろう、そのうちにほとんど全編を弦楽器のピチカートだけで演奏するというこの可愛らしいボルカを作り上げてしまったのだ。

⑤ オペラ「騎士バズマン」チャルダッシュ

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

哀愁を湛えた“ラッシュ”で始まり、少しずつ熱を帯びていって情熱的な“フリッシュ”に入るハンガリー・ロマの舞踏<チャルダッシュ>は、ウィーンの宮廷ではあまりに反道徳的、反体制的という理由で1851年まで禁止されていた。しかしいったん禁止が解かれ、その後さらにハンガリーが帝国内でオーストリアと同等の自治権を得るようになると爆発的に流行し、リストやブラームスを始め多くの作曲家も題材に取り上げ

るようになった。ヨハン・シュトラウスⅡ世も1874年のオペレッタ「こうもり」に登場させているが、ここで演奏されているのは1892年にウィーン宮廷歌劇場（現国立歌劇場）で上演された彼の唯一のオペラ「騎士バズマン」の中のバレエ音楽の一部。オペラ自体は惨憺たる結果に終わったが、評論家のハンスリックが「スコアの中で輝く宝石のような名曲、ただ一つの救い」と評したのが、この＜チャルダシュ＞が含まれている「バレエ音楽」で、もとのオペラが忘れ去られた今も、このように演奏され続けている。

[6] ボルカ「おしゃべりなかわいい口」

（ヨーゼフ・シュトラウス）

兄と違ってヨーゼフは最初音楽家になる気はなく、工芸学校に学んで当事の花形職業だった技師として世に出た。その彼が過労で倒れた兄の代理として指揮台に立ったのは27歳の1853年。その時でさえ彼はまだ本格的な転向は考えていなかった。“自分の意志に反した天才”と彼のことを評したのは、シュトラウスの研究家であり例年“ニューイヤー・コンサート”の放送用アナウンス原稿を執筆しているフランツ・マイラーだが、性格的にも派手なことが苦手なでこつこつと研究に打ち込むほうが好きだった

にもかかわらず、1870年に43歳という短い生涯を閉じるまでのわずか17年間に、彼は283曲もの明るく楽しいダンス音楽を作曲したのだ。この家庭を愛したヨーゼフならではのボルカが書かれたのは1868年。10歳の一人娘カロリーネのおしゃべりがヒントになったともいわれる。随所に「ジ・ジ・ジ・ジー」という音を発するラトルが登場するのが特徴だが、この演奏では音色が違う数種類のラトルが効果的に使い分けられている。

[7] ジョッキー・ボルカ（ヨーゼフ・シュトラウス）

アンコールの1曲目として演奏されたのがこの曲。速いボルカのリズム、それも＜ガロップ＞風なリズムに乗せて馬が疾駆する様子を描いたヨーゼフの傑作。1870年2月、彼がノイローゼから事故を起こしてこの世を去るわずか5ヶ月前に書かれた作品ながら、暗さは微塵もない。“ニューイヤー・コンサート”での演奏回数が一番多いヨーゼフ・シュトラウスの作品で、最近では1987年、やはりアンコールに登場している。

[8] ワルツ「美しく青きドナウ」

（ヨハン・シュトラウスⅡ世）

今では“ニューイヤー・コンサート”のアンコー

ルといえばこの曲、とすっかり定着してしまっているが、1958年以前は必ずというものではなかったそうである。しかし全世界へ衛星中継で放送されるこのウィーンならではの華やかな催しの最後を飾るのに、ウィーンへの讃歌であり、オーストリアの非公式な第二国歌とも呼ばれるこの曲以上にふさわしい音楽はないだろう。本来は男声合唱曲として、1867年2月15日に開かれたウィーン男声合唱協会のコンサートのために作曲されたものだが、同年3月10日にはここで聴かれるような新しいコーダが書き加えられたオーケストラ版も発表された。以来120年以上“ワルツのなかのワルツ”として、またもつともポピュラーな管弦楽名曲として親しまれ続けてきた。例年のテレビでは、この曲にバレエ・シーンが加えられるのだが、1989年は珍しく躍動感溢れるクライバーの指揮ぶりをじっくりと楽しませてくれていた。

[9] ラデツキー行進曲（ヨハン・シュトラウスⅠ世）

会場の手拍子とともに演奏されるこの曲で“ニューイヤー・コンサート”を終わるのも恒例となっている。＜ワルツの父＞と呼ばれるヨハン・シュトラウスⅠ世（1804－1849）が、1848年にイタリアで勝利を収めたラデツキー将軍の凱旋

祝賀会のために作曲、オーストリア陸軍に献呈したマーチで、トリオの部分に当時流行していた作曲者不詳の甘美なワルツのメロディが、そのままリズムを2拍子に変えただけで挿入され、効果をあげている。

<1989年 保柳 健>

※89年盤の曲目解説は89年発売時のものを転載しております。

Disc 3

① 歌劇「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲 (ニコライ)

1992年の初頭を飾るニューイヤー・コンサートは、ウィーン・フィルの創立150年に当り創設者オットー・ニコライ(1810-1849)に敬意を表して、その代表作であり、また彼の名をドイツ歌劇史上に不朽のものとする事になった「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲に始まる。ニコライは1841年にウィーン王立歌劇場の首席楽長となるが、1848年にはベルリンの歌劇場に移っており、翌1849年に「ウィンザーの陽気な女房たち」が同地で好評のうちに初演されてからわずか2ヵ月後に世を去ることとなった。この歌劇はシェイクスピアによる同名の喜劇を題材にモーゼンタールが台本を書いており、全体は3幕7場から成っている。

序曲はアンダンテ・モデラートの序奏部でロマン的な気分のうちに開始され、続くアレグロ・ヴィヴァーチェ、ソナタ形式による主部では軽やかに奏される第1主題と、もう1つ弦で流麗に歌われる第2主題を中心に、かなり入念に書かれた展開部及び主題の再現を通して明るい流動感の中に豊かな生氣を生かして、この歌劇の喜劇的な内容にふさわしい軽快な気分を盛

り上げている。

② ボルカ・マズルカ「町といなか」 (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

ワルツ王、ヨハン・シュトラウスⅡ世(1825-1899)が造園業者協会の主催する謝肉祭コンサートのために書いた、3拍子のマズルカのリズムを生かしたボルカ・マズルカであり、1868年に作曲されている。なお、この曲では最初の部分がいなか風の素朴な気分を持つのに対して、中間のトリオでは都会風のしゃれた気分となる、その対比が面白い効果を上げている。

③ ワルツ「オーストリアの村つばめ」 (ヨーゼフ・シュトラウス)

ヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)はワルツ王より2つ年下の弟で、最初は建築技師をしていたが、兄の病気の際に代ってその楽団を指揮して1853年にデビューする。作曲家としても間もなく作品を発表するようになり、最初は純音楽の作曲家を志していたという事だが結局はワルツやボルカなど280にも上る作品を残すことになる。指揮者としても兄の楽団を交替で指揮し、またしばしば宮廷舞踏会にも登場するなど多忙な活躍を行っていた。

そのヨーゼフは生来体が弱かったこともあるのだろう、兄の陽気な性格に比べるとロマンチストでデリケートな感傷家でもあり、そんな性格はヨーゼフの作品にもはっきりと影を落としている。「オーストリアの村つばめ」は「天体の音楽」と並んでヨーゼフを代表する存在となっており、村つばめの訪れた初夏のウィーンを思わせるいかにも爽やかな自然の雰囲気巧みにとらえられている。ゆっくりした序奏に続く最初のワルツでは爽やかな抒情の中につばめの鳴き声も聞かれ、この後いくつかの華やかなワルツが続くが、同時にそこにはヨーゼフ独自のロマン的な体質もはっきりと印されている。そしてコーダでは再びつばめの鳴き声を取り入れた冒頭のワルツが回想的に戻って曲を結んでいる。

④ ボルカ「観光列車」(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

ワルツ王による速度の速い軽快なボルカであり、1864年に遊覧鉄道の開通式に当って作曲された。題名のようにいかにもスピード感のある列車の動きを思わせながら、同時にそれを楽しむ乗客達のにぎやかな興奮も伝わって来るようである。「トリッチ・トラッチ・ボルカ」や「雷鳴と電光」などと並んで、ワルツ王の巧みな描写力を見せた曲の1つになっている。なお、こ

こで聞かれる鉄道のラッパは、指揮者のクライバー自身が吹いているものである。

⑤ 喜歌劇「ジプシー男爵」序曲 (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

今日オベレッタ作曲家としてのヨハン・シュトラウスの名を高からしめている「こうもり」から11年後に当たる1884年、もう1つこれも大きな当りをとった「ジプシー男爵」が現われる。今はジプシーの群れに身を投じているが、実はハンガリー領主の息子バリンカイが父の邸にかくされた莫大な財宝を発見し、ジプシー娘と見られているが実はこれも高貴の出であるザッフィと結婚する、涙と笑いと夢がふんだんに盛り込まれた物語。ハンガリーの小説家ヨカイの原作に基づいて同じハンガリーのシュニッツァーが台本を完成、シュトラウスが完成までに2年をかけたこのオベレッタには、ウィーンとハンガリーの両方の要素が見事な合体を遂げており、序曲は劇中の旋律を次々に用いて、このオベレッタの気分を生き生きと伝えてくれるのがとても楽しい。

⑥ ワルツ「千一夜物語」(ヨハン・シュトラウスⅢ世)

ワルツ王ヨハン・シュトラウスがオベレッタ作曲家として最初に発表したのは、1871年の「イン

ディゴと40人の盗賊たち」だった。これは大変な成功で、一ヶ月に亘って連続上演された程大きな人気を呼び、その結果オペレッタ作曲家としてのワルツ王の人気を一挙に確立するところとなった。しかし台本がまずかったため、ワルツ王の死後、1900年になってから台本に手を加えて題名も「千一夜物語」と改め、最初とはまるっきり違うオペレッタとして蘇ることになった。このような復活は勿論このオペレッタの中に多くの美しい音楽が含まれていたために他ならず、現在では「ジブシー男爵」の場合と同じくオペレッタの中からいくつかの曲を取り出してまとめたワルツ「千一夜物語」によって広く知られるようになっている。序奏とそれに続く3つのワルツ、それに後奏とから成っており、その旋律にはひとときわ優美であてやかな表情が込められているようである。

[7] 新ピチカート・ボルカ (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

もう1つの名高い「ピチカート・ボルカ」がヨーゼフとの共作で1869～70年頃に書かれた後をうけて、「新ピチカート・ボルカ」の方はワルツ王単独で1893年に作曲された。これも「ピチカート・ボルカ」と同じゆったりしたボルカであり、弦楽器奏者は全員が弓を置いて、ピチカートだけ

で演奏する。弦をはじく軽やかな効果上、テンポの動かし方の妙でなかなか気の利いた作品になっている。

[8] ペルシャ行進曲 (ヨハン・シュトラウスⅡ世)

1864年に作曲された、エキゾチックな感じを生かした行進曲である。その2年前に開始された、ヨーロッパとアジアを結ぶ通信ケーブルの敷設にあたって、当然その通路となる広大なペルシャ王国に人々の関心が注がれ、そんな風潮の中でこの曲は書かれている。

[9] トリッチ・トラッチ・ボルカ

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

トリッチ・トラッチというのはおしゃべりを意味しており、急速でせわしく、いかにも女房たちのおしゃべりを思わせるように、陽気で賑やかに奏される。1858年に作曲された。

[10] ワルツ「天体の音楽」(ヨーゼフ・シュトラウス)

作曲者のヨーゼフ・シュトラウスは、宇宙の運行を一つの偉大なハーモニーと考えてこの曲を書いたと言われているが、前奏とそれに続いて奏されるワルツの優美でロマンチックな旋律は、あたかも高い空の彼方から舞い降りて来

て地上を澄みきった調和で満たすかのようであり、聴き手の想像力をはるか宇宙の彼方へと運び去って行く。これに続くいくつかのワルツは華やかさの中にも優雅なロマンと幻想のたたえられているのが如何にもヨーゼフの作品らしく、一段と華やかな最後のワルツの後、コーダでは再び最初の旋律も短く戻ってくる。

[11] ボルカ「雷鳴と電光」

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

急速に激しく奏されるボルカであり、雷鳴や稲妻、そして驟雨などを生き生きと描き出してゐる。最初直ちにせわしない感じに始まって、中間に流麗な旋律によるトリオが置かれ、また最初の部分となるが、終始ティンパニの連打が雷鳴のとどろきを描き、シンバルのクラッシュが稲妻のきらめきを思わせるように入って、スリリングな興奮を高めている。作曲は1868年。

[12] ワルツ「美しく青きドナウ」

(ヨハン・シュトラウスⅡ世)

ここからはアンコールの曲目に入って、いよいよウィнна・ワルツのコンサートになくはならない「美しく青きドナウ」が登場する。このあまりにも名高い名曲は、最初はウィーン男声合唱協会

の指揮者ヘルベックの依頼で、1866年に声楽付のワルツとして作曲された。その後このワルツが本当に大きな賞賛をえるのは翌年パリの万国博に招かれたヨハン・シュトラウスが、純粹のオーケストラ曲に改めて紹介した際であり、この時「美しく青きドナウ」は完全にパリを征服してしまう。次いでこのワルツはロンドンでも熱狂的に迎えられ、更に1872年の夏、「世界平和50年祭」を祝賀する催しが開かれた際、ワルツ王はボストンでの演奏会を指揮するよう招かれ、この時集まった途方もない数の人々に一斉にこれが歌われることによってワルツ王の栄光は頂点に達するのである。

[13] ラデツキー行進曲 (ヨハン・シュトラウスⅠ世)

父親ヨハン・シュトラウス(1804-1849)の代表作であるこの曲は、1848年3月に作曲された。この年の3月、フランスの2月革命に呼応してウィーンにも革命の炎が燃え上り、この国で最も嫌われていた人物である宰相メッテルニヒはイギリスへ亡命を余儀なくさせられる。息子のワルツ王は主として友人の音楽家や学生たちに対する同情から革命側に肩入れし、これに対して父親ヨハンは王党側に味方するのだが、それはウィーンの町を混乱に陥れた人々を許すこ

とができないという気持ちから出たものに他ならず、シュトラウス父子はどちらも政治的な思想の上からと言うより、同じウィーンを愛する気持ちを抱きながらもそれぞれの立場の違いから両方の陣営に分れる結果になったのだ。

「ラデツキー行進曲」はオーストリアの将軍ラデツキー元帥の率いる軍隊が、ロンバルディア平原で、革命に呼応して反オーストリアに立ち上ったイタリア軍を破り、8月6日ミラノに入城したことを讃えて作曲され、イタリア戦線で死んだ将兵のための軍禮祭で初演された。この時は出席者が軍関係者や熱心な愛国主義者ばかりであったところから、盛んな拍手で迎えられたのは当然と言ってよいが、父ヨハンの強い愛国心から発したこの曲が一般に受入れられないはずはなく、今日ではウィーンはもとよりオーストリアの人々にとって、自分達の国に対する忠誠心の拠り所として無くてはならないものになっているのである。

<1992年 家里和夫>

※92年盤の曲目解説は92年発売時のものを転載しております。

<演奏者について>

カルロス・クライバー

1930年ベルリンに生まれる。父は当時ベルリン国立歌劇場音楽監督であった往年の名指揮者エーリヒ・クライバー。1935年にエーリヒがいわゆる「ヒンデミット事件」でフルトヴェングラーを支持したことからナチ政権と対立を深め、クライバー家は一家揃ってアルゼンチンに移住する。

大学では化学を専攻するが、音楽への思いを断ちがたく、父エーリヒに指揮者を志していることを告げる。エーリヒは1年の間に音楽的才能が認められなければ音楽の道をあきらめ、20歳になってからブエノスアイレスで音楽を学び始め、52年に同地のラ・プラータ劇場でデビューする。その年には父とともにヨーロッパへ戻り、スイス連邦工業大学に入学するが、翌年にはミュンヘンのオペレッタ劇場の見習い指揮者となった。

54年、ボツダムのハンス・オットー劇場のカペルマイスターに就任し、指揮者として正式にデビューする。それからはライン・ドイツ・オペラ、チューリヒ歌劇場、ヴェルテンベルク歌劇場（シュトゥットガルト）などでの活躍で国際的にも認められ、68年にミュンヘンのバイエルン国立歌劇場の指揮者に迎えられた。

73年にはウィーン国立歌劇場、74年にはバイロイトにもデビュー。89年と92年にはウィーンの「ニューイヤー・コンサート」に出演、大きな話題となった。

74年にバイエルン国立歌劇場を率いて初来日、その後もミラノ・スカラ座（81年）やバイエルン国立管弦楽団（86年）とともに来日、いずれも大成功を収めた。92年にもウィーン・フィルを率いて来日をするはずだったが、病気のためキャンセルとなった。94年10月にはウィーン国立歌

劇場日本公演で来日、「ばらの騎士」の圧倒的な名演を残していく。

95年あたりから活動機会が激減し、レコーディングはなくなり、時たま思い出したように演奏会をする程度となってしまう。そして2003年12月に妻が亡くなり、精神的打撃を受けたと言われるマエストロはその後を追うように2004年7月13日、スロヴェニアの首都リュブリャナの近郊、コンチャで74年の生涯を閉じたのである。



SICC 204-6 STEREO

©1999 Sony Music Entertainment Inc. / 1992 Sony Classical GmbH. © 1993 Sony Classical GmbH.
Manufactured by Sony Music Japan International Inc. is a Registered Trademark of Sony Corporation.
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.

＜取り扱い上のご注意＞ ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。●保管上のご注意 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

お問い合わせ：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント 〒102-8353 東京都千代田区六番町4番地5

Sony Music Online Japan <http://www.sonymusic.co.jp/>

Sony Classical Official Site <http://www.sonyclassical.jp>